

ハンガリーのお笑い芸人
ナジ・バンドー・アンドラーシュ
その6 病院からの手紙

今回は「ラジオ・キャバレー傑作選1987年」というカセットに収録された「病院からの手紙」をご紹介します。マジヤール（ハンガリー）・ラジオで一年間放送されたお笑いネタから視聴者の投票で選ばれた人気ネタを集めたもので、司会者の解説によると、ナジ・バンドーはこの年15回この番組に出場しているのだが、他の14のネタが獲得した票全部合計した数より多くの票をとったのがこの「病院からの手紙」。モデルとなった病院があるエゲルは、ブダペストの北東約95キロのところにある中小都市。内容的には、建築工事屋のずさんな作業と、病院側の職員不足や医療廃棄物処理といったいずれも同じ問題がでてくるわけだけれど、グーグルで検索してみると、最近も職員が履歴と資格を詐称していたのが見つかったり患者の受け入れ拒否で訴えられたりとか、未だ問題が絶えないようだ。（最近は良くなってきた、という記事もあったけど）

前回同様、上記のカセットに収録された実況版と作者自身のネタ集「路上一路傍にて」に掲載されている（おそらく）最初の版をご紹介します。容易に想像がつくことながら、番組に与えられた時間の制約や客席の反応を見てけずっていくのだけれど、最初の版の方が前後関係がわかって面白い。読者も少し大胆になってきて、原作の方は逐語訳を心がけた分だけ実況版では少し遊ばせてもらった。例えば「排気ダクトに転がっているコロッケ」は本当は、牛ひき肉ロールとでもいうか、小さな筒状にまとめたハンバーグのたねに小麦粉をつけて油で揚げるものだから、パン粉をつけないメンチ・カツというかひき肉のから揚げとでもいうか迷う料理なのだけれど、病院の売店で買えそうなものは、とコロッケに置き換えてみた。（さすがに肉まんにする勇氣はなかった）。もう一箇所は「外科医が新しいつなぎを発明したので表彰を受けた」という部分。日本語ではどうしてもうまいもじりが見つからなかったの、でっちあげた。原文がどうなってるかは、原文版の方を読んでください。それではスタート！

病院からの手紙（実演版）

ナジ・バンドー・アンドラーシュ

僕は去年の春、ある地方病院に行きました。そこでは最近改装工事が行われたばかりだったそうで、工事屋どもは言葉の厳密な意味で、恐るべき代物を後に残していきました。こういう話が始まったのは、演しもの^だ後でみんな腰を下ろしたときでした。僕はこれで幾つかの即席のギャグを作ってみせ、みんな大笑いしました。僕がメモをとりながら「みんな、これはすごくいいよ、僕のネタでこの話をしてもかまわないかな？」とたずねると「いいけど、お願いですから、エゲル病院の話だというのだけはやめてくださいね」と言われました。

この手紙の中で建築工事について触れている部分は全部事実です、ちょっと色づけされてるけれど。それ以外のことは僕が思いついたんだけど、それだって幾分かの事実が土台になっているんですよ。

親愛なるわが妻よ！

私の手紙がこの上なく健康でいる私を見いだしてくれるように（訳注1 ハンガリー語の手紙でよく使われる書き出しの文句だが、もちろん通常は「私の手紙がこの上なく健康でいるあなたを見いだしますように」である）・・・この手紙は伝染病病棟から書いている、願わくは君の手元に届きますように・・・

看護婦が、これを読めば君は死ぬほど笑い転げて、君までここにかつぎこまれて来ることになるかもしれない、と言った。

さて、社会主義者の大部隊が彼こそ第二のチャーホフと賞賛されても、私はちっともうらやましいと思わない、なんせ病院全体に全部で三人看護婦しかいないので（訳注2 英語や独語でもそうだが、ハンガリー語でも尼僧院の修道女や看護婦を「姉妹」という）・・・

残念ながら私のところには一人もいない、というわけで君がいなくて本当に寂しい・・・

ここではわれわれは、手術以外は何もかも自分でやらなくてはならない、だがここには危うく手術までするところだった肉屋がいる！・・・驚くなかれ、彼は患者の額をぶんなぐるところから、手術を始めようとしたのだ・・・幸運にも途中から主治医の先生がやって来て（注射器を）刺した・・・

寝具の交換も自分たちでやらなくてはならない・・・私はいつもイムレおじさんと交換している・・・私は書籍普及協会の女性から「皮膚病と性病」という本をもらったが、彼女は「読んでください、でも人に普及させないでね」と言ったっけ・・・

同室の仲間たちについて少し・・・ここにいるのはおおむね～夜中に死んだかの仮病患者を除いては～重病患者ばかりだ・・・

私のすぐ横には一人の英国人旅行者が寝ている、彼は列車事故で重傷を負った・・・そのことは、私が彼から膝下二本分離れて横になるのに対して、彼は私から膝下一本分離れて横になることからわかる・・・

六番目がソビエトの派遣労働者で、われわれはイヴァン・呑兵衛ヴィッチと呼んでいる・・・いいかい、彼は病気ではなくて、モスクワではうまく処理することが出来なかったのだからここに連れてこられただけなのだ・・・なんと彼は、純粋セックス（80度以上のワインスピリッツ）で消毒してもらおうと、喉と食道に棒編み針で穴を開けたのだ・・・

それからここにはすでに一度手術を受けたのだが、医療過誤事故のため再手術を受けなくてはならなかった男がいる、なんと彼は足のあったところに手を、手のあったところに足を縫いつけられたのだ・・・ところが外科医はこの移植手術で表彰までされた、だがり

ハビリ・センターから「足とり手とり」の訓練はやったことがないと苦情がでて、元通りにもどすことになったのだ・・・

ここでは誰もが、時間をつぶそうと何かしている・・・トミカはゴキブリを集めているし、イヴァンはというとみなが何を話しているかスパイさせようと、全員の脇に一匹ずつ蜘蛛を置いている・・・

トイレでは、誰も入っていないトイレの座席がうるさく音をたてている・・・
食事はというと悪くない・・・今朝はレーズンと桃を添えたフローティング・アイランド（訳注6 メレンゲまたは泡立てた生クリームをかけたカスタード）がでたが、私はレーズンしか食べられなかった、看護婦が私の喉の桃（扁桃腺）を取り除いてしまったからだ（訳注7 原文ではアーモンド、ハンガリー語では扁桃腺のことを「喉のアーモンド」という）・・・

調理場と病理解剖室はたった一枚の薄っぺらい壁で隔てられているだけで、冗談だと思うかもしれないが、誓って本当だ。

おまけに、病理解剖室と分娩室と売店は同じダクトで換気されていて、中ではへその緒と墓に棺を下ろすひもとコロケと一緒にいる・・・

水道管は、しびんを洗う水が水道の蛇口にもどるように接続されてい

る・・・あひるさん（付きしびん）がいくら水をほしがっても、ムダなのである・・・

言っても信じないだろうが、昨日私の熱が上がった、それで私はそのあとを追ってエレヴェーターに乗った・・・大いなる体験だった！・・・いいかい、運搬用エレヴェーターは横幅が狭く設計されていて、そのせいで死者を横にしては運べない、縦にするよりないのだ・・・死者たちを運搬するヨージはノーヴェル賞だってもらえるかもしれない、すなわち彼は医師たちより有能なのだ、なんせ彼らの元患者たちを立たせたのだから・・・

多分君にはとても信じられないだろうが、工事屋どもは廃棄物処理パイプを作るのを忘れたのだ、かくて病理解剖室の廃棄物は調理場のゴミと一緒に同じゴミ箱に入っている・・・すでに一度ゴミ収集業者たちもゴミに足が生えた（訳注8 「～に足が生えた」というのは何かがなくなくなった、見えなくなったときのハンガリー語の慣用表現）と指摘した・・・気の毒に彼らはもう、こわくてゆっくりと手探りすることも出来ない、ゴミは注射針でいっぱいなので・・・こうした定年退職組のゴミ収集業者たちはこんな風にして破傷風にかかること必須なのだ・・・

さて、今日ついに私の病名が明らかになった・・・三人の医師が予想し、ドクター・コヴァーチが勝った・・・ドク・サボーは私が産褥熱、あるいは子宮外妊娠だと言った。ドクター・ガーティは私を一瞥すると投げやりに、私は胃下垂だと断言した・・・私は彼に「勘違いなさっています、これは胃下垂ではありません、ベッド・マットのスプリングが私の重さで床に垂れているだけなんです」と言った・・・ドク・コヴァーチはというと一発で言い当てた、彼によれば私は慢性の病巣高熱症だ・・・彼がタバコに火をつけるとき、私が体温計で火をあげたことから、そう推量したのだ・・・それ以来携帯用消火器で注射される・・・

まあ同じことだ・・・もし全てがその通りなら、明日手術がある・・・一つ確かなのは、ドク・コヴァーチが執刀することだ・・・驚くなかれ、彼にとってこれは最初の手術なのだ、というわけでこれ以上書くのはよそう・・・

君の亡夫よりキスを！

病院からの手紙（原文）

ナジ・バンドー・アンドラーシュ

親愛なるわが妻よ！

私の手紙がこの上なく健康でいる私を見いだしてくれるように（訳注1 ハンガリー語の手紙でよく使われる書き出しの文句だが、もちろん通常は「私の手紙がこの上なく健康でいるあなたを見いだしますように」である）・・・この手紙は伝染病病棟から書いている、願わくは君の手元に届きますように・・・

看護婦が、これを読めば君は死ぬほど笑い転げて、君までここにかつぎこまれて来ることになるかもしれない、と言った。

さて、社会主義者の大部隊が彼こそ第二のチェーホフと賞賛されても、私はちっともうらやましいと思わない、なんせ病院全体に全部で三人看護婦しかいないので（訳注2 英語や独語でもそうだが、ハンガリー語でも尼僧院の修道女や看護婦を「姉妹」という）・・・

残念ながら私のところには一人もいない、というわけで君がいなくて本当に寂しい・・・

ここではわれわれは、手術以外は何もかも自分でやらなくてはならない、だがここには危うく手術までするところだった肉屋がいる！・・・驚くなかれ、彼は患者の額をぶんなぐるところから、手術を始めようとしたのだ・・・幸運にも途中から主治医の先生がやって来て（注射器を）刺した・・・

寝具の交換も自分たちでやらなくてはならない・・・私はいつもイムレおじさんと交換している・・・私は書籍普及協会の女性から「皮膚病と性病」という本をもらったことがあるが、彼女は「読んでください、でも人に普及させないでね」と言ったっけ・・・

同室の仲間たちについて少し・・・ここにいるのはおおむね～夜中に死んだかの仮病患者を除いては～重病患者ばかりだ・・・

ゾリカはずる賢いやつだが、毎日病院から脱走している・・・昨日やつは、「意識を失ったので、遺失物保管所に行く」と言っていた・・・トミカは狂っていて～武器製造工場とガス器具工場で平和会議を開催するのがやつこのこだわりのまとだ～鎮静剤を与えられてからはすっかり変わってしまい、朝になるともう水鉄砲でアヒルさん（付きしびん）を撃った・・・こんちくしょうめ、われわれはこのスープも飲んだのだ・・・

私のすぐ横には一人の英国紳士が寝ている、彼は列車事故で重傷を負った・・・そのことは、私が彼から膝下二本分離れて横になるのに対して、彼は私から膝下一本分離れて横になることからわかる・・・

それからここには神経病のイムレおじさんもいる、彼は火曜の夜私にすでに三度めの攻撃をかけてきた、私がトランシルバニア(訳注3 第一次世界大戦後はルーミアニア領となりハンガリー人の失地回復の悲願の地)だと想像していて、いかなる値を払ってでもとりもどしたいのだ・・・

六番目がソビエトの派遣労働者で、われわれはイヴァン・呑兵衛ヴィッチと呼んでいる・・・いいかい、彼は病気ではなくて、モスクワではゴルヴァチョフのせいでうまく処理することが出来なかったのです、ここに連れてこられただけなのだ・・・なんと彼は、純粹セッス（80度以上のワインスピリッツ）で消毒してもらおうと、喉と食道に棒編み針で穴を開けたのだ・・・

それからここにはすでに一度手術を受けたのだが、医療過誤事故のため再手術を受けなくてはならなかった病人がいる、なんと彼は足のあったところに手を、手のあったところに足を縫いつけられたのだ・・・ところが外科医は表彰までされた、なんせ彼は、新型の手つき足つき(訳注4 シャツとズボンの上下が一続きになった仕事着、いわゆる「つなぎ」のこと)を発明したので・・・

ここでは誰もが、時間をつぶそうと何かしている・・・トミカはドイツ語から抜け落ちないようにとゴキブリ(訳注5 ハンガリー語ではゴキブリのことを「ドイツの昆虫」という)を集めている、イヴァンはというとみなが何を話しているかスパイさせようと、全員の脇に一匹ずつ蜘蛛を置いている(訳注6 原文では「トコジラミを置いている」)、・・・イムレおじさんは、金まで稼いでいる・・・足が菌病なのでエノキダケ栽培で毎日200は稼ぐ・・・

食事はというと悪くない・・・今朝はレーズンと桃を添えたフローティング・アイランド(訳注6 メレンゲまたは泡立てた生クリームをかけたカスタード)がでたが、私はレーズンしか食べられなかった、看護婦が私の喉の桃(扁桃腺)を取り除いてしまったからだ(訳注7 原文ではアーモンド、ハンガリー語では扁桃腺のことを「喉のアーモンド」という)・・・彼女だって十分に病気っぽく見える、すなわち正面に二つの良性腫瘍をつけているではないか・・・

調理場と浴室はたった一枚の薄っぺらい壁で隔てられているだけだ、冗談だと思いかもしれないが、本当だ。そのことは今日になってやっとわかったのだが、今までだって食堂にはいつも新鮮なレバーがあるので、怪しいとは思っていたのだ。

おまけに、病理解剖室と分娩室と売店は同じダクトで換気されていて、中ではへその緒と墓に棺を下ろすひもと牛ひき肉ロールが一緒になっている・・・

水道管は、しびんを洗う水が水道の蛇口にもどるように接続されている・・・あひるさん（付きしびん）がいくら水をほしがっても、ムダなのである・・・

言っても信じないだろうが、昨日私の熱が上がった、それで私はそのあとを追ってエレベーターに乗った・・・大いなる体験だった！・・・いいかい、運搬用エレベーターは横幅が狭く設計されていて、そのせいで死者を横にしては運べない、縦にするよりないのだ・・・死者たちを運搬するヨージはノーヴェル賞だってもらえるかもしれない、すなわち彼は医師たちより有能なのだ、なんせ彼らの元患者たちを立たせたのだから・・・

多分君にはとても信じられないだろうが、工事屋どもは廃棄物処理パイプを作るのを忘れたのだ、かくて病理解剖室の廃棄物は調理場のゴミと一緒に同じゴミ箱に入っている・・・すでに一度ゴミ収集業者たちもゴミに足が生えた（訳注8 「～に足が生えた」というのは何かが無くなった、見えなくなったときのハンガリー語の慣用表現）と指摘した・・・気の毒に彼らはもう、こわくてゆっくりと手探りすることも出来ない、ゴミは注射針でいっぱいなので・・・こうした定年退職組のゴミ収集業者たちはこんな風にして破傷風にかかること必須なのだ・・・

さて、今日ついに私の病名が明らかになった・・・三人の医師が予想し、ドク・コヴァーチが勝った・・・ドク・サボーは私が産褥熱、あるいは子宮外妊娠だと言った。ドク・ガーティは私を一瞥すると投げやりに、私は胃下垂だと断言した・・・私は彼に「勘違いなさっています、これは胃下垂ではありません、ベッド・マットのスプリングが私の重さで床に垂れているだけなんです」と言った・・・ドク・コヴァーチはというと一発で言い当てた、彼によれば私は慢性の病巣高熱症だ・・・彼がタバコに火をつけるとき、私が体温計で火をあげたことから、そう推量したのだ・・・それ以来携帯用消火器で注射される・・・

まあ同じことだ・・・もし全てがその通りなら、明日手術がある・・・一つ確かなのは、ドク・コヴァーチが執刀することだ・・・驚くなかれ、彼にとってこれは最初の手術なのだ、というわけでこれ以上書くのはよそう・・・

君の亡夫よりキスを！